

戦時下全寮制学校事務官奮戦記

太宰府市 朽原 幸郎

衣食住が完全に備わっている現在、50年前のことを思い出すと全く隔世の感がする。私の手元に非常に古びた日誌がある。一見、反古同然、紙屑のように見える代物である。それも道理、勤務先に毎日送って来ていた官報の帯封を、丁寧にはいで裏返しにして綴じたものである。送り元は東京市麹町区大手町内閣印刷局。送付先は宮崎市日之出町 逓信省 宮崎海員養成所となっている。日誌の日付は昭和19年9月16日から始まって終戦の年の6月で終わっている。

今、思うにノートに限らず文房具全部が配給制で、文具店に配給になった時を見計らって買いに行かなければ鉛筆、消しゴム、ノートなどすぐ手に入らなかった。そこで帯封を捨てるにしのびず、裏面の使用を思いついたものと思う。この手記はその日誌からの抜粋である。

海員養成所というのは、当時の政府が早急に下級船員を養成する必要に迫られ、全国に急ぎよ設置した速成の船員養成機関だった。当時勤務していた熊本逓信局から派遣されたのであるが、当時の肩書は逓信事務官だった。赴任した時、養成所は2階建ての寄宿舍1棟がやっと完成したばかりだった。教室は居室の前の自習室を充てていた。生徒は主に地元の宮崎と鹿児島から募集というより、県当局から割り当てられた高等科卒業の小学生だった。

学徒動員は大学生だけでなく、通年動員といって、当時の小・中学生は、陸海軍の学校へ強制的に入学させられていた。小学生でいえば、少年航空兵学校へ何名、少年戦車兵学校へ何名というように、陸海軍の少年兵養成機関に割り当てられていたので、海員養成所へ希望して入所して来る生徒は非常に少なく、優秀な生徒は陸海軍関係の学校へ進み、残りの学力の低下した生徒が殆んどだった。教官の話では、高等科卒とはいえ平均して小学5年生程度の学力しかなく、ひどいのは4年生位の学力で、航海科、機関科の教官は、教科書の読み方から教えねばならず、各専門課程の完全理解は到底望めず、授業は遅々として進まぬ状況のようだった。

応募して来る生徒は年々減り、終戦の年4月に発注した入学願書の印刷が、漸く7月に納入され、応募者も20名に達しなかった。

海員養成所は、全寮制で逓信省所管とはいえ、佐世保鎮守府より武官（特務大尉）と下士官が派遣されていたので、海軍省の管轄下でもあった。そのため食糧、特に米と麦の配給は一応確保されていた。しかし、燃料と副食物の調達には設立当初より頭痛のタネだった。電化製品が普及した現在、スイッチ1つ押せばお湯も沸き、ご飯も簡単に炊き上がるが、戦時中の一般の燃料は薪が主だった。そしてその薪を運ぶのは馬車に頼るしかなかった。一度に約100人分位の米を炊き、味噌汁や副食物を煮炊きするのだから、薪を燃料とする大釜が4つ位並んでいた。4人の賄員が3時頃から起きてお湯を沸かし、そのお湯に研いだ米を入れ、しっかり蓋をして炊く湯たき飯という方法と、普通の炊き方の二通りをしていた。それが毎日三度三度行うのだから、少し位の薪ではすぐ無くなるので、薪の確保と共に薪を運ぶ馬車の手配に明け暮れ

ていた。重量物の運搬は、現在大型・中型のトラックで簡単に事は運ぶが、薪は手に入ったが馬車がないという事が度々あった。当時、薪を大量に購入するには、まず海員養成所が海軍省と逓信省の管轄であること、特に海軍省の管轄下にあることを強調する必要があった。最初、県庁の経済課に実情を説明する文書を提出し、証明書を貰い、それを持って燃料組合に行き購入の交渉をし、その足で馬匹組合に行き馬車による運搬の交渉をせねばならなかった。両者同時に交渉が成立せねば、折角手に入れた薪も養成所まで届かぬことになる。しかし、馬も人間同様徴用されているので、馬匹組合では少ない馬車をやりくりしていた。

戦況が逼迫するにつれ、薪はどうか手に入ったが馬車がないという事態が多くなった。そういう時にはつてを求めて馬車曳きを探さねばならなかった。ある時、運搬手段が全然なく、万事窮して農家から荷車を何台か借り、生徒を使って運んだこともある。電力事情も極端に悪くなり、製材所も休業して薪もできぬことがあった。燃料組合に交渉し、海軍用の600束のうち200束を三拝九拝して分けて貰ったこともある。終戦前には製材所が休業に追い込まれたので、松丸太を多量に買い込み、薪割り人夫を雇ったという記録もある。

現在、金さえ出せば欲しい物は何でも買えるが、昭和19年頃は『企業整備』といって、あらゆる店の統廃合が行われ、電気部品一つ買うにさえ、オイソレとはなかなか手に入らなかった。テーブルタップ1つ買うにもA電器店に行けば廃業しているので、B電器店に行くよう言われ、B店に行けば在庫が無いという具合だった。筆記具といえば、今は鉛筆でもボールペンでも自由に買えるが、戦前は鉛筆かペンだった。ペンに付き物のインクが手に入らなかった。郵便局庶務課の知人から、空き瓶を持って来ればインクを分けるというので、照空隊より牛乳の空き瓶30本を分けて貰い、それを持ってインクを買い、生徒用に充てたこともある。

終戦の年の2月頃から米の配給がいよいよ少なくなり、米に大根の千切りを入れてオジヤを作る、いわゆる代用食を生徒に出すようになった。休日でも三度の食事は出していた。第一、休日に外出しても町に食堂は無かったので、どうしても弁当を持たせねばならなかった。外出時の副食物は沢庵ばかりだったので、少しは目先の変わった物を出そうということで、佃煮組合に行ってアミの佃煮と削り節を買ったこともある。

終戦直後、宮崎に上陸してきた米軍（進駐軍）は、否応を言う暇もなく養成所を接收、1日の内に追い立てられ、山麓の兵舎跡に急遽移転した。生徒は50名もいなかったと思う。相変わらず食糧品と燃料の調達に明け暮れていたが、海員養成所が山麓には生徒の実習にも事欠く有様で、四国香川県の粟島商船学校に吸収合併されることになり、やっと私の苦勞も終止符を打つことになった。